

海を望む アジール



01 海を望みながら穏やかな時の流れを感じる領域

コンセプト

本設計の敷地は平和記念公園内にある摩文仁の丘として知られている靈域ゾーンの奥に位置しており、1つの終着地であり折り返し場所でもあるこの土地にどのような「海を眺められる休憩所」が望ましいかを考えました。その場所に辿り着くまでの長い上り坂の両側には各都道府県等の「戦争や平和に対する碑文」が添えられた「慰靈塔」が立ち並んでおり、「戦争」「慰靈」そして「平和」といった様々な「色」を強く感じる登り坂となっているかもしれません。そんな長い上り坂の終着地である休憩所ではせめて穏やかな心で休息をとて欲しいと思いました。

「アジール」という言葉には（聖域、無縁所、自由領域）という意味があります。ここはただただ美しい沖縄の海を眺めながら穏やかな時の流れを感じられる場所、自然と建築が共に存在する曖昧な領域のような施設、そんな様々な「色」とは無縁の「海を望むアジール」を提案します。



02 既存休憩所を「海を望むアジール」に変化させる

「屋根と内部空間」

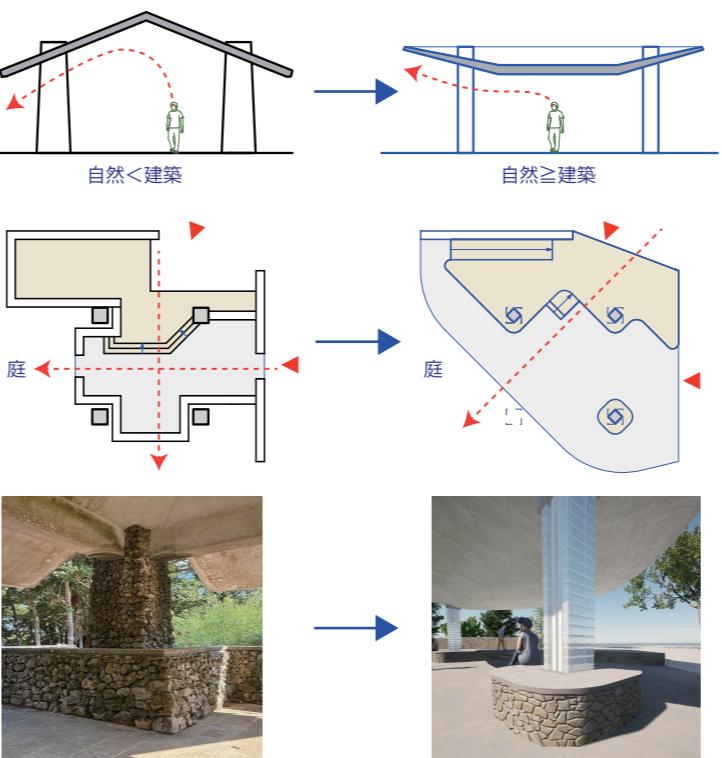
既存休憩所の内部空間は天井が高く、視線がまず縦方向に奪われてから低い軒の先にある自然に移るという行為が発生してしまいます。自然と建築の間に隔たりを感じてしまいます。自然と建築との領域を曖昧にしつつ視線が建築から自然へともっとシームレスに繋がるように屋根を外部に向けて弧を描きながら少し開くこととしました。

「建物の方向と柱」

休憩所の軸方向を既存から 45° 振ることで海を望みやすくなり、西側の開いた庭スペースとも一体感のある配置計画となります。また存在感のある太いRC柱は基礎と立ち上がりを残して鉄骨柱に変更し、海を望む上でどうしても邪魔になってしまいう海側の柱を1本撤去することで建物内部から海に向かって広がっていくような空間構成としました。

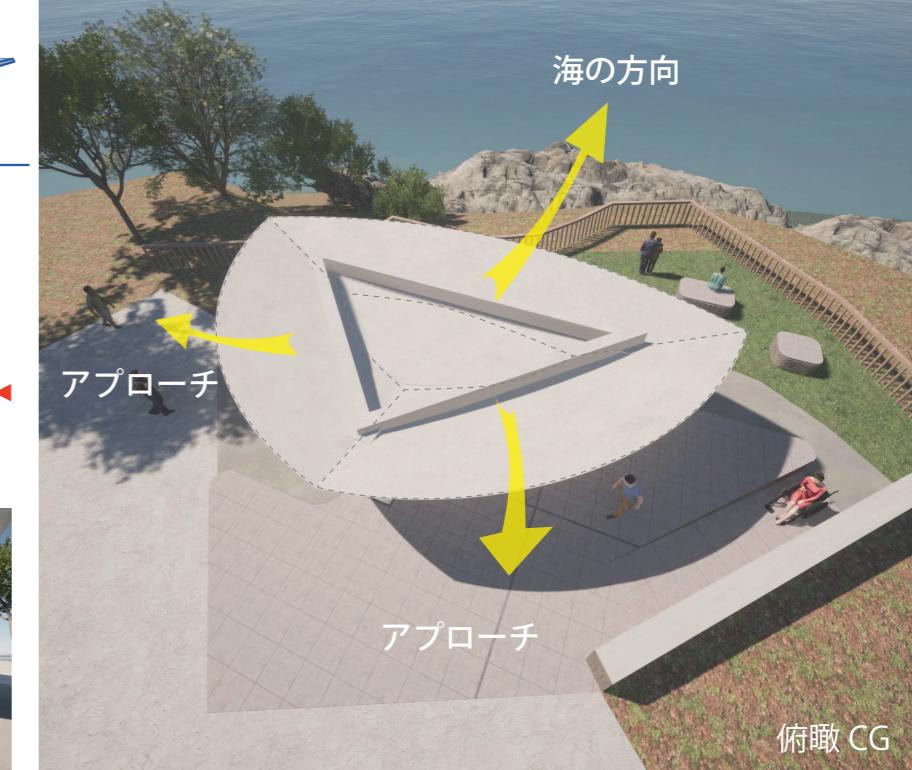
「ガラスレンガブロックと石壙」

鉄骨柱の3方をガラスレンガブロックで囲うことと、外部環境を淡く映り込ませ、柱自体の存在感も薄めることとしました。また視線の妨げとなる石壙は一部以外は撤去し、それらに用いられている石材は腰掛スペースやベンチの立ち上がりに再利用します。



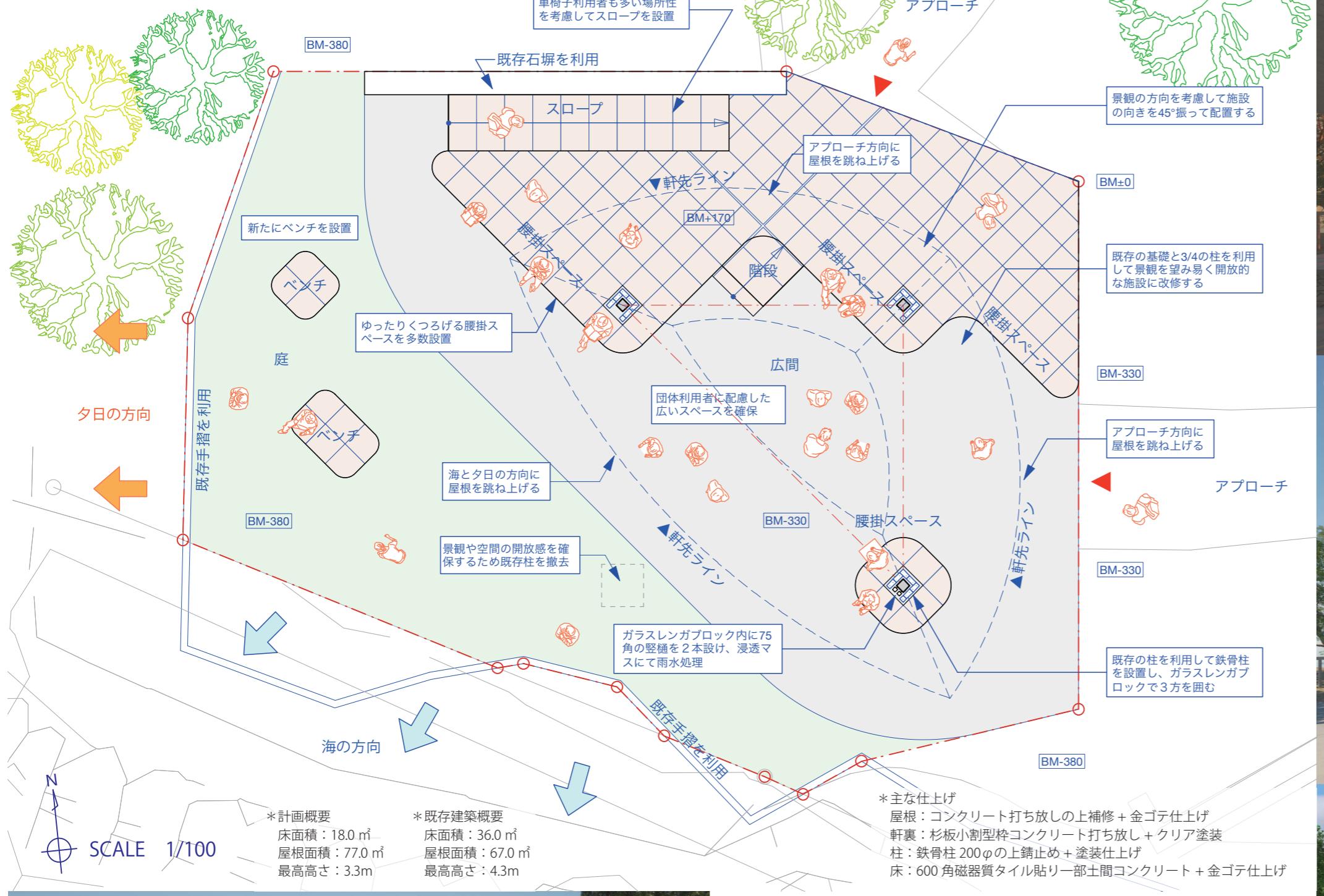
03 シンプルな屋根の操作で分かりやすい空間構成

海の方向



俯瞰 CG

04 海を望むための平面計画

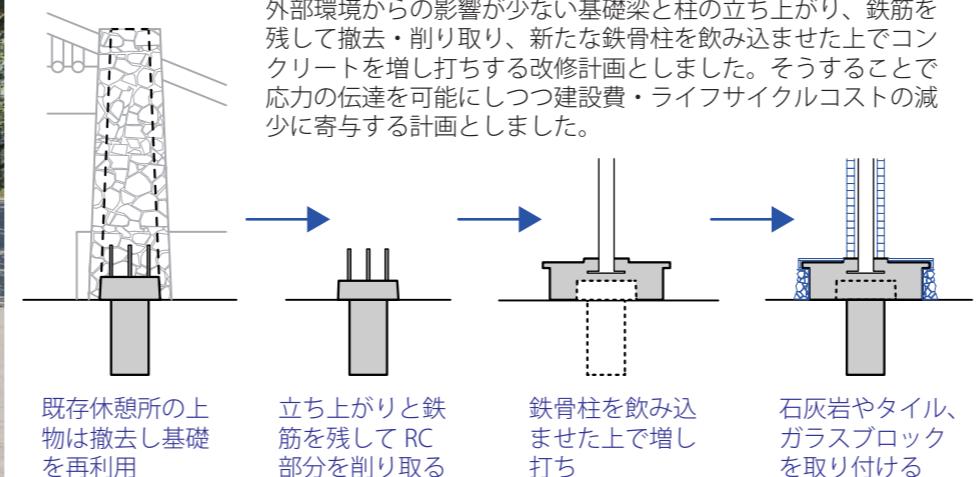


05 遠目からでも見通しの良い アジール



06 既存の基礎を利用した新たな柱との一体化

既存休憩所の上部梁や屋根部分はRC表面の爆裂が多数見られたため、上物の再利用は困難であると考えます。そこで比較的外部環境からの影響が少ない基礎梁と柱の立ち上がり、鉄筋を残して撤去・削り取り、新たな鉄骨柱を飲み込ませた上でコンクリートを増し打ちする改修計画としました。そうすることで応力の伝達を可能にしつつ建設費・ライフサイクルコストの減少に寄与する計画としました。



07 夕焼けや海、自然を存分に取り込むアジール



08 影をしっかり造るために屋根の高さは抑える



09 ランドスケープとベンチ



既存敷地の高低差をそのまま利用して広い腰掛スペースを設置しており、緩やかに繋げることで座る方向や人数、自然環境の変化にも柔軟に対応することができます。またこれにより海側や西側の小庭への緩やかな導線が造られることでそれらの外部環境と施設の一体的な利用を促すよう設計しています。

幅広い方々の利用を想定して施設の真ん中には階段、西側にはスロープを設置しておりバリアフリーに配慮しています。

既存のベンチは老朽化していたため同じ位置に建物と同じデザインの新たなベンチを設置します。「施設→庭→海」といった敷地全体としても海を望むために必要であると考えます。